



真蔵院と武石氏ゆかりの大型板碑

真言宗の伽羅陀山三會寺真蔵院は、大同元年(806)開基と伝わります。後に父の千葉常胤よりこの地を与えられて「武石」を名字とした三男胤盛が、母の菩提を弔うため建久8年(1197)に柳地蔵菩薩を本尊として祀り、菩提寺に定めたと伝えられます。

境内には、胤盛が母の追善供養のため建立したとされる高さ約2.3mの大型板碑があります(市指定文化財)。正面に大きく宝珠と阿弥陀三尊の種子(仏の名を示す梵字)が彫り込まれ、永仁2年(1294)の銘が読み取れます。もとは武石町2丁目の愛宕山古墳に建てられていました。石材は埼玉県西部の秩父産緑泥片岩で、河川・海を利用してこの地に運ばれたものと考えられます。

中世の千葉は各地を結ぶ海と陸の交通の要衝でした。この板碑からは、千葉氏一族が海と陸の領主として、広範な人と物の交流を掌握する姿を垣間見ることができます。

境内の波切不動堂は、胤盛の守り本尊であった一寸八分(約5.5cm)の不動尊を曾孫の武石長胤が正元元年(1259)に祀ったものとされ、海を生活の糧としてきた武石、幕張、検見川の船頭衆の厚い信仰を得てきました。

そのほか、胤盛と天女との羽衣伝説にまつわる羽衣神社の碑が残るなど、真蔵院は武石の地と千葉氏との深い関係を今日に伝えています。



武石の板碑(千葉市指定文化財)
板碑は死者供養のための卒塔婆の一種です